

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.32-3 (通巻95号) 2025.3.17発行

希望はどこにあるのか

きみしま あきひこ
君島 東彦 (立命館大学国際平和ミュージアム館長)

さまざまな政治変動を経験した2024年を終えて2025年を迎えたいま、国際平和ミュージアムのこの1年間の活動を振り返ってみたいと思います。わたしにとって最大の問いは、現在の世界の閉塞状況の中で、平和への希望はどこにあるのか、ということです。国際平和ミュージアムの任務は、いまの世界の暴力状況を学問的にリアルに認識したうえで、どこにそれを平和的に変革する道、可能性があるのかを来館者とともに考え、それを示していくことだろうと思います。

ここでは、2024年の国際平和ミュージアムの活動の中から、わたしが感じた可能性、希望をいくつか書き記しておきます。

わたしは2025年に創設80周年を迎える国連の活動に希望を持っています。国際平和ミュージアム・リニューアル記念として、11月1日に国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満泉さんの講演を聴き、立命館大学、APUの学生、附属校の生徒のみなさんとともに中満さん対話をしました。この中で、日本の報道では十分に伝わってこない国連の活動——国家間の調整を静かに深く浸透して行なっていること——を知りました。国際協調、国際協力が弱まっているいま、もっとも重要な国際協力の柱組みである国連を支えていく日本の役割を痛感します。間違いなく国連に希望があります。

中満さんが講演の中で強調したのは、若い世代の役割でした。もちろん若い世代に希望があります。国際平和ミュージアムの運営においても、学生スタッフの貢献ははかりしれません。平和をつくる次の世代を準備することは、われわれの最大の課題のひとつです。立命館大学の各学部、附属校と連携しつつ、若い世代を育てる仕事を2025年も継続・強化します。日本被団協が2024年のノーベル平和賞を受賞したこと自体が希望ですが、ノルウェー・ノーベル委員会が授賞理由の中で核兵器廃絶をめざす努力が若い世代に継承されていると述べていることも重視したいと思います。

2024年の活動の中で、戦没画学生慰霊美術館・無言館との連携を深めたことも重要だったと思います。わたしたちは1999年から無言館との関係を築いてきましたが、昨年の連携強化は2005年の無言館京都館「いのちの画室（アトリエ）」開室以来のわたしたちの大きな「進化」であるといえます。平和創造にとって芸術の持っている力を再発見、再確認したことはわたしたちの希望です。12月5日に、無言館共同館主、内田也哉子さんをお迎えして、内田さんがファシリテーター役をつとめて開催された「絵は読むもの？ 無言館共同館主・内田也哉子さんとの対話型鑑賞会」は、わたしたちが芸術から平和にアプローチする新たな可能性を示したと思います。内田さんはNHKの番組「no art, no life」のナレーションを5年間つとめていらっしゃいます。この番組は、「今まで見たことのない芸術に圧倒される5分間」です。この番組の表現を借りれば、「no art, no peace」なのです。立命館大学は2026年4月に17番目の学部としてデザイン・アート学部を（同時

に大学院デザイン・アート学研究所も）開設します。わたしは、この新学部と国際平和ミュージアムのコラボレーションを実現したいと思っています。

ロシア・ウクライナ戦争、ガザ危機は続いています。これらの武力紛争、人道的危機を法的に克服するための努力が国際司法裁判所や国際刑事裁判所等などでなされています。非常に時間がかかりますが、もちろんここにも希望があります。

しかし同時に、わたしたちを悩ませるのは、どうしてロシアはウクライナを攻撃するのか、どうしてイスラエルはここまでガザを攻撃するのか、われわれの正義の感覚を超えたレベルに至るロシア、イスラエルの暴力行使の問題です。これについては、12月21日に開催されたシンポジウム「平和ミュージアムの挑戦——記憶と対話を通じた戦争によるトラウマの癒し」が大きな示唆を与えてくれました。このシンポジウムは立命館大学大学院人間科学研究科と国際平和ミュージアムの共催でしたが、平和を考えるにあたって、心理学や精神分析学がどれほど重要かを痛感させました。

このシンポジウムはロシア、イスラエルの問題を扱ったわけではありませんが、わたしは多くのことを考えさせられました。ロシアの攻撃、あるいはイスラエルの攻撃の背景には、まだ克服されていないロシア人が過去に受けた屈辱、ユダヤ人がこれまで長年にわたって受けてきた屈辱、まだ癒やされていないトラウマがあると思います。もちろん現在のロシアやイスラエルの軍事行動はおよそ正当化されるものではなく、われわれは現在進行中の殺戮を止めるために全力を尽くすべきです。しかし、ロシアやイスラエルに対して国際法を遵守せよというだけでは抑えきれないロシア人やユダヤ人が負った心の傷を、国際社会はどのように認識して、癒していくことができるのか、という課題も自覚せざるをえません。さらに、ウクライナ人やパレスチナ人がいま経験している苦難、屈辱、心の傷が、これから長年にわたってどのような「反作用」をもたらすのかと考えると、われわれの悩み、課題はきわめて大きなものとなります。このような過去の屈辱に由来する心の傷、トラウマを癒す空間として平和ミュージアムには役割、可能性があるということも12月21日のシンポジウムはわたしたちに認識させました。平和ミュージアムは記憶の共有と対話を通じてトラウマを癒す空間として機能することが可能であり、それによってさらなる暴力の連鎖を防ぐことができるということです。わたしはここにも希望があると感じます。

2025年はこれらの希望の芽を育てる年にしたいと思います。2025年もみなさまのご支援をたまわりますよう、お願い申し上げます。



新しいスタッフとしての抱負

イマニシ ヒロミ (学芸員)

学芸員として採用していただき、約9か月が過ぎました。今回は補佐として携わった特別展について綴ってみようかと思ひます。

『阿波根昌鴻——写真と抵抗、そして島の人々』は、1955年から沖縄伊江島で米軍による強制的土地接収が行われる中、非暴力の抵抗運動をリードした阿波根昌鴻が撮影した写真約350点と資料を紹介する展覧会です。

会期中、阿波根氏と親交のあった方とお話する機会がありました。米軍に家も畑も奪われ、わずかな芋で飢えを凌ぎ栄養失調になっていく人々。お金を稼ぐ手段がない中で、演習場に落ちた核模擬爆弾に付いているパラシュートを買ってもらうため一生懸命に切り出したそうです。生活のなかに常に生き延びるための闘いがあったことを教えてくれました。お話をしていると当時の音や匂いまで感じられるようで、写真に写っている人々が確かに生きてきた1人ひとりの人間として語りかけてくるのを感じました。

本展では、闘いの記録だけでなく、島に一台しかないカメラで阿波根氏が撮影した島の人々の記念写真を最終章で紹介しています。ある日、伊江島出身の女性たちが来館されました。闘いの記録として被写体になったという点では、阿波根氏と共闘した方々ではあるのですが、とっとも穏やかに写真を観ながら思い出話を花を咲かせていました。土地闘争の真っ只中を生き抜いてきた小さな子どもたちが何十年の時を超え、プロジェクターから映し出される自分や家族・友人のポートレートを眺めている。その様相は、『ニュー・シネマ・パラダイス』のラストシーンを思わせるような光景で、込み上げるものがありました。阿波根氏が撮影した3,600枚もの

写真は、島の家族写真であり島の宝でもあるのです。このように伊江島から何名もの方々がお越しになり、惜しみなく記憶の共有をしてくれました。やはり実際に体験された方の言葉には力があり



阿波根昌鴻氏の写真を観る子どもたち

ます。阿波根氏の写真や資料、言葉は言うまでもなく大事に受け継いでいかなくてはならないものですが、それと同じくらい体験者の記憶を継承していくことの大切さも切実に感じました。

展覧会には5,000人以上の方々に御越しいただきました。沖縄の研究者や写真家、歴史学専攻の学生、毎年平和学習のために伊江島を訪れている保育園の園児と先生方、たまたまチラシを見て立ち寄ってくれた方など、幅広い方々が、阿波根氏の意志に引き寄せられるように当館を訪れてくれました。展示物と来館者の間だけでなく、集まった来館者同士にもたくさんのお話や議論が生まれていて、その時はじめて展覧会に息が吹き込まれるのを感じました。

このように多様な意見を包含する議論の場としてミュージアムをご活用いただけるように、これからも展覧会やワークショップ等でそのような機会を提供できればうれしく思います。

ボランティアガイドコラム

私は、48年間中学校で社会科を教えてきた。ある時「戦争は、なぜ起こるんですか？ やめさせられないのですか」と、中学3年の生徒に質問された。多くの人の命が奪われ続けるウクライナやガザの現実を、自分のことと受け止め「何ができるか」と怒りさえ感じさせる問いだった。『学ぶとは希望を語ること』なら、なおさらどう答えるべきか言葉に詰まった。目の前の子どもたちにどう教え、多くの情報をどう整理して、考えてもらえばいいのか、格闘の日々だった。

昨年3月に退職し、ボランティアガイドをさせて頂いている。アテンドを担当した時は、この中学生の話を紹介し「疑問を大切に展示と向き合い、考えるヒント＝平和のかけらを見つけて」と呼びかけている。一方的な説明でなく来館者との対話を目指しているが、容易ではない。年表展示は“帝国主義の世界”からだが、帝国主義は中3の教科書に初めて登場し、小中学生のほとんどは意味を知らない。「質問はありますか」「何を知りたいですか」と話しかけても、対話にならないこともある。それでも展示をよく見て、質問もしてくれる子どもたちもいる。その多くは事前学習をして、ワークシートも持って来ている。一定の時間で効果を上げるには、事前学習が必要ではないだろうか。先日、伊江島で平和を学

んできたという保育園児が来て驚いた。積極的に展示を見ようとするが、字が読めないで「戦前の民家」の道具など実物展示に人気が集まる。来館前の子どもたちの事前学習・知りたいことがわかれば、発達段階に応じた対応がもう少しできるのではないかなと思う。



ドイツからの留学生は七三一部隊の人体実験の展示で「ドイツもsame」と話し、大阪から「京都の空襲のことを知りたい」と来た人、またシンガポールから「中野信夫氏のことを調べたい」など成人の来館者からは多様な要求がある。質問に答えられないこともしばしばで、そんな時は先輩に訊ねる。90代の戦中を知るガイドの方は「まだまだ学ばなければ」と勉強を続けられている。平和のピースを探す作業は私自身の課題でもあり、来館者と対話を重ね“希望”を語りあいたい。ただ残念なのは、地元京都の中高生の来館が少ないことだ。

(ボランティアガイド：西原 弘明)

学生スタッフ 活動記録

学生プロジェクトスタッフ編

私は、2023年6月から学生スタッフのガイドスタッフになりました。美術館や博物館に行くことが好きで、いつか内部の仕事に関わってみたいと思っていたので、募集の知らせを見て、すぐに応募を決めました。ガイドスタッフを選んだ理由は、高校時代にアナウンスをしていたので、人前で喋ったり、説明をしたりすることが得意だったからです。そのため、リニューアル後のガイドスタッフは、「対話」をするファシリテーターのような存在に変わるという話を聞いたときは、少し驚きました。しかし同時に、来館者と話すことが楽しみになりました。

ミュージアムには、様々な年代の方がいらっしやいます。来館者だけでなく、ボランティアガイドの皆さんや、私と同じ学生スタッフ、ミュージアムの職員の皆さんなど、学生スタッフになる前よりも、人と話をする機会が大幅に増えました。ボランティアガイドの皆さんは、勤務年数にかかわらず経験豊富で、私にはない視点を持っています。教員だった方もいらっしやるので、歴史についてはもちろん、来館者との接し方に対するアドバイスなどもいただけます。昨年の6月には、新しいガイドスタッフも入ってきました。ガイドスタッフの出自も様々で、異なる考えを持つ学生スタッフと話す機会が増えたことも、とても嬉しいです。

ミュージアム内では、現代の展示付近でガイドをすることが多いです。ここは、歴史を学びに来た来館者にとっては、あまり興味を惹かれないのか、スルーされることもしばしばあります。足早に過

ぎ去ってしまうこともあります。しかし、これからの歴史を作っていくのは「いま」を生きる私たちなので、強制はできないけれど、一緒に何か考えてもらえるといいな、という気持ちを大切にしています。

このエリアの最後に、問いかけひろばという場所があります。ここでは、展示を見て、自分の考えを共有することができます。タブレットに考えを入力すると床に投影される展示や、付箋にメッセージを書いて壁に貼る展示です。この場所には、すぐに考えを入力できる人、迷ってしまう人、ふざけてしまう人、一人で考える人、友達と一緒に考える人、いろいろな人がいます。考えをアウトプットするだけではありません。自分とは考えの異なる、他の人の考えを読んで、「そういう考えを持っている人もいるんだな」と改めて考える空間でもあり、対話型ミュージアムとして、特徴的な場所なのではないかと感じています。

私は、今年の3月で卒業を予定しており、学生スタッフとしての勤務も残りわずかです。平和について考え、対話することのできるこのミュージアムの居心地の良い空間が、これからも残っていくことを願ってやみません。

(学生スタッフ：荒平 由佳)



今後のギャラリー企画展

	企画名
4月	「村山康文写真展『追憶の記録～ベトナム戦争終結から50年』」(村山康文)
5月	「日本の治安維持法に殺された韓国の国民的詩人・尹東柱—治安維持法制定100周年」 (伝言館・安齋育郎)
6月	「アメル・ナーセル (Amer Nasser) 『GAZA SIGNAL OF LIFE』展」 (GAZA SIGNAL OF LIFE 実行委員会・砂守かずら)
7月	「原爆棄民—韓国・朝鮮人被爆者の証言」(伊藤孝司)
8月	「大和楓個展『Sitting in the Time : シットイング・イン・ザ・タイム』」(大和楓・長谷川新)
10月	「祈りの森—戦時下の音風景とアートでつなぐ声・語り」(京都大学・森谷理沙)
11月	「絵本 Over the Wall の展示、及びワークショップ」(明星大学・清田洋一)
12月	「健康は平和の礎、平和は健康の源：戦後に世界で最初に「発明」された母子手帳」 (日本WHO協会・中村安秀)
1月	「Playgrounding War and Peace」(ライデン大学・Sybille Lammes)
2月	附属校企画①
3月	附属校企画②

遊心雑記

ご近所衆とラジオ体操と フォークダンスをやっています

安齋 育郎 (立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長)

あと3年もすると米寿という歳なのに、ご近所衆と毎朝8時にラジオ体操をやり、フォークダンスを踊っています。ラジオ体操は雨天以外の平日、すでに300回をこえています。フォークダンスは週2回踊りますが、幸運なことに、同じ町内に日本フォークダンス連盟京都支部の理事と連盟公認のフォークダンス・インストラクターを務める1さんご夫妻が住んでいて、ボランティア精神豊かに、優しく丁寧に東欧の曲を中心としたフォークダンスの世界に私たちをいざなってくれるのです。

先日、1さんご夫妻のイニシャチブで「フォークダンス・サロン」が開かれ、ラジオ体操仲間と飛び入り参加者で賑わいました。1さんご夫妻がヨーロッパの民族衣装をたくさん用意され、試着も楽しませてくれました。写真を見て下さい、試着した参加者の楽しそうな表情！

1さん夫妻はフォークダンス文化についてのポーランドの美しい本も自由に閲覧できるように用意してくれました。私たち参加者も「オクラホマ・ミキサー」など6曲ほどのフォークダンスを踊りましたが、1さん夫妻がプロフェッショナルなパフォーマンスを演じてくれて、一同大満足のサロンになりました。

このご近所衆の会は、宇治市折居台に住む人々が折々にい

ろいろな企画を愉しむ会なので「折々の会」と名づけられています。ラジオ体操やフォークダンスのほかにも、お食事会をしたり、いちご狩りに行ったり、月例の茶話会を開いたり、人々のコミュニケーションの機会をあれこれ工夫しています。面白いことに、ラジオ体操を始める8時の10分ぐらい前にはすでにメンバーが三々五々集まっておしゃべりタイム、ラジオ体操が終わった後もストレートにゴーホームとはならずまたまたおしゃべりタイム。この会は身体的健康だけでなく、コミュニケーションを通じての社会的健康の機会にもなっていて、健康寿命を維持することに役立っています。これぞ平和なコミュニティの営みです。

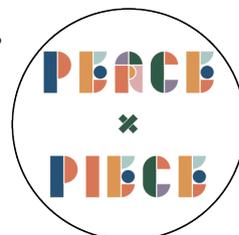


フォークダンス・サロン参加者の変身 (撮影・安齋育郎)

公式YouTube、国際平和ミュージアムの魅力を発信するチャンネルです。
ぜひチャンネル登録をお願いします！

アカウント名 @rwp_museum

URL https://www.youtube.com/@rwp_museum



立命館大学国際平和ミュージアムだより

 立命館大学国際平和ミュージアム
Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University

第32巻 第3号 (通巻95号) 2025年3月17日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

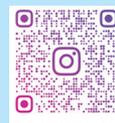
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL: 075-465-8151 / FAX: 075-465-7899

<https://rwp-museum.jp>



HP



Instagram



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

今後、特別展のご案内、ミュージアムだより等、国際平和ミュージアムより送付をご希望されない場合、また、送付先の住所変更等ございましたら、氏名・団体名、送付先住所、電話番号、FAX番号をご記入の上、FAXにて国際平和ミュージアム (075-465-7899) へ送信ください。